

## フィリピンにおける多言語表示について\* ——看板・掲示に見る多言語使用の実態——

大 和 田 栄

### 0. はじめに

フィリピンでは、1987年の憲法において、国語としてはフィリピノ語が、また、公用語としてフィリピノ語と英語が制定されており、アジアの中でも英語が通用する地域であると言われることも多い。しかし、一方でフィリピン人自身が評価する英語の運用能力については、下降傾向であるという報告もある<sup>1</sup>。

一方、お互いに語彙・文法面で類似しているとは言え、100以上の言語を有する多言語国家であるフィリピンにおいて、国語としてのフィリピノ語の地位も確立しているとは言い難い<sup>2</sup>。このフィリピノ語は、基本的にマニラ周辺で使用されるタガログ語をベースとしたものと考えるのが妥当であるが、研究者の間でも色々論議も多い。現在、国家の言語政策として、セブアノ語など、かなり多数の話者を持つ地方語からの反発などを避けるという理由もあり、語彙的にも文法的にも地方語を取り入れて、タガログ語色を少しでも減らして標準化された「フィリピノ語」作り上げようとする動きがあるものの、一般の意識としては「タガログ語」の知名度の方が高く、首都マニラで日常見聞きする言語は「タガログ語」であると考えるのが妥当である<sup>3</sup>。

日常の言語運用を観察してみると、一人の話者においても、タガログ語と英語を場面や相手によつて使い分けたり、また、その2言語間でのコード・ミキシングの頻度もかなり高い。話者の母語がタガログ語以外の地方語である場合には、その地方語も加えて3言語間で同じ事が起きることも観察される。一般に、コードミキシングは話し言葉において生じるのが普通であるが、大和田(2004)で報告したとおり、フィリピンにおいては、書き言葉においても生じ、タガログ語の中に語彙レベルを超えて英語がしばしば混入するという状況が存在する。

こういった言語状況の一部として、フィリピンの町中では、不特定多数に対して向けられていると考えられる掲示・看板などにおける言語表示も、色々な要請のもと多言語（通常はタガログ語と英語）の中から、コードミキシングの場合も含めて、選択表記されている。公共性が極めて高く、伝達の徹底が必要な、緊急的な注意など促すような場では、もちろん、タガログ語と英語の両言語で表記されることが多いが、状況によっては、どちらか一方のみが選択される場合も多く、公共性の高いものも含めて、きちんとした基準を見いだすことは容易ではない。

本研究では、こういった多様な多言語表記実態を記録・把握することから、フィリピンの言語使用についての実態を考察・分析していくことを目標に、発信する側と受信する側の意識などについても、考察を試みたい。その出発点として本稿では、公共の掲示や看板の類を主に観察した結果より、そのいくつかを報告する。

## 1. 多言語表記

日本国内でも、最近では随所に外国語表記を見かけることが多い。公共交通機関では、日本語の他、英語は当然のように記され、ハングル・中国語の文字表記も増えてきている。漢字・ひらがな・カタカナ・アルファベットを含む日本語の文字体系に困難を感じる外国人訪問者にとっては、それなりに助けになっていると思われるが、これらは、日本全土で等しく行われている措置では決してなく、地域差もあり、東京などの大都市圏では多言語表示が多く見られるものの、地方の市町村などでは、観光地ですら、日本語による表記しかないところも多い。

一方、本稿の対象であるフィリピンにおいては、観光地など外国人が訪れる場所においては、英語の表記が当たり前のようななされ、場合によっては、「タガログ語」表記はないような場合もある。外国人専用の場所であるならば、多くが理解をしない可能性の高い「タガログ語」を表記しないのは当然であるが、フィリピン人も極普通に利用する場所において、公用語であり国語でもある言語が表記の対象になっていないのは、不思議に感じられる面もある。一つには、2言語使用の煩雑さという側面もあるだろうが、「国語」自体が確立していない現状を、「英語」によって補っていると考えるのが妥当と言えるかもしれない。

もちろん、空港のような場所では、掲示・ポスターの類は英語だけの場合もあるが、以前に比べると、最近ではタガログ語が併記されているのもよく目にするようになっている。これらは、言語政策的な側面もあるのかもしれないが、大上(1997)に記されている調査(1989年)によると、90%以上がタガログ語を理解可能な言語とし、英語を含めた他の地方語を圧倒しているという状況も十分関係しているとも考えられる。

掲示などの言語は、伝達できなければ意味がないため、もっとも通用範囲の広い言語を選択するのは至極当然である。しかしながら、フィリピンの現状はそれほど簡単でないようと思える例もあり、不特定多数一般に注意を促すような掲示でも、英語だけ、タガログ語だけで表記されるものもある。対象としている読み手を意識し、英語を解する人にだけ伝わればいいとか、主にタガログ語を理解する一般住民だけに伝わればいいなど、単一言語だけの表示にはそれなりの理由もある場合もある。また、スペースの都合など、煩雑さを避ける、というような理由もあるかもしれない。本稿では、そういう書き手の側の「本当」の理由の解明まで行うことはできないが、多言語表示の実体の一端を、具体的な実例とそれが表示されていた状況などとともに報告する。

## 2. 資料収集場所・方法

本研究では、不特定多数が目にする言語素材を主たる対象とし、町中に見られる看板やチラシ、食料品などの製品に記される指示文などを中心に、多種多様なものをターゲットにした。収集方法としては、チラシなどは入手できるものは現物を入手する場合もあるが、現物の入手が不可能な、看板・掲示物の類はデジタルカメラで撮影をすることで記録した。そのため、撮影自体ができないか、しくいものは、考察の対象からはずれることになる。なお、今回の報告では、看板・ポスターの類を対象とする。

これらの素材は数年間変化をしないものの中にはあるが、広告・宣伝の類のものについては、日々変化をしていくものもあり、範囲の設定自体が困難なため、収集にあたっては、無作為に目についたものを記録した。収集場所はタガログ語圏である首都マニラを主に、他言語圏の市町村でも行った<sup>4</sup>。

### 3. 表記言語使用実態

フィリピン（マニラ）における言語の表示については、おおよそ次の4通りが考えられる。

- (A) 単一言語表示（英語）
- (B) 単一言語表示（タガログ語）
- (C) 二言語併用（バイリンガル表示）
- (D) 二言語併用（コードミキシング表示）

(A)(B)はもっとも単純なケースで、タガログ語・英語のどちらか一方の言語のみで表示される場合である。現時点では、もっとも通用範囲が広い言語はタガログ語であるため、タガログ語による単一言語表示がもっとも多い可能性もあるが、印象的には、英語の表示量とそれほど大きく差があるようには思えない。タガログ語を解さない外国人などが、フィリピンであまり苦労せず生活できる状況を考えると、地域差はもちろんあるだろうが、英語による単一言語表示もかなり多いと考えられる。

また、(C)(D)は、今回の実例ではすべてタガログ語と英語の二言語併用であるが、(C)が基本的に英語とタガログ語で同内容を概ね翻訳的に伝えるものであるのに対し、(D)は類似の内容を伝える場合もあるが、基本的には、コードミキシングが起きているように見える場合である。(C)の場合にも、まさしく、上下や左右に並んで表示される場合もあれば、多少離れて記される場合もある。表現などによっては、(C)と(D)の線引きが難しい場合もあるが、公共性の高い場面では(C)が、商品の宣伝・広告の類では(D)の形が多いように思う。（もちろん、両方の場面において、单一言語使用の場合もある。）

以下、本稿の中心的なターゲットは(C)(D)であるが、単一言語使用の(A)(B)も含めた4つの区別と設置されている場面・状況などとあわせて、具体例を概観する。

#### 3-1. バイリンガル表示

公共性が高く、内容をきちんと伝達することが要求される、緊急時や危険回避に関わる場合には、2言語併用がもともと多い。その場合でも、上位にある言語は英語である場合が多いという印象はある。例えば、(1a)の写真は高架鉄道車内の緊急時に押すボタンのことについて、右に英語、左にタガログ語で表記しているが、同じ車両内でも、(1b)でより詳しく緊急時にドアを開ける手順については英語のみで記されている。

(1a)



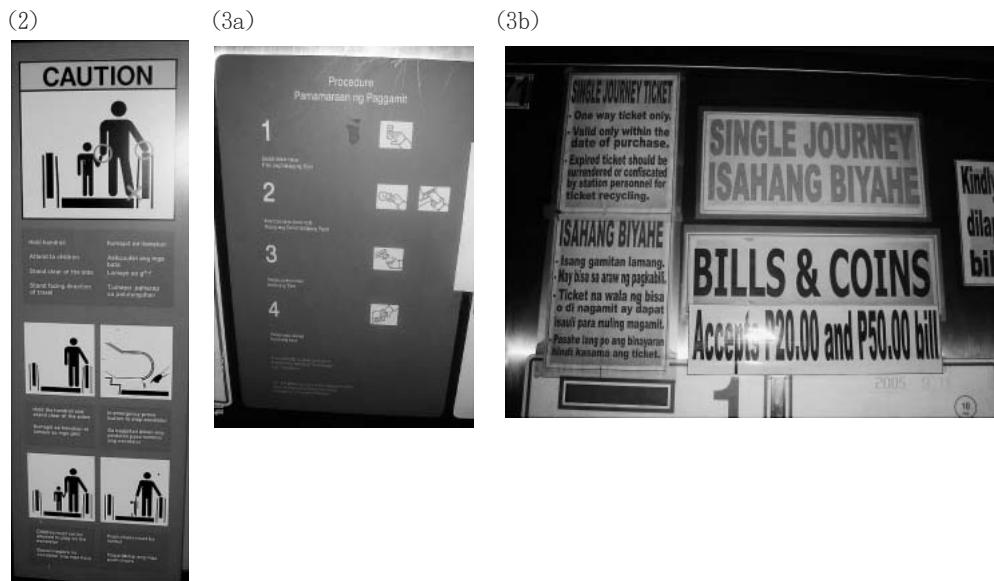
(1b)



上記の高架鉄道の他に、首都マニラの公共交通機関は、路線バス・ジープニー（乗合小型バス）・タクシーがあるが、英語・タガログ語の2言語がきちんと併記されている印象が高いのは、高架鉄道である。路線バスやジープニーには、きちんとした注意書き・掲示などはあまり見られない。また、タクシーでは、英語の表示が多いが、タガログ語を併記している場合もある。

また、高架鉄道はマニラで3つの路線があるが、英語とタガログ語の2言語使用表示が多いのは、一番新しいLRT2である。LRT2の駅の中には、乗車券も一部自動販売機が導入され、これらも2言語での指示がなされており、エスカレータの注意なども2言語の併記がなされている。印象的には、公共性の高いタガログ語と英語を併記することで、言語的弱者を作らないようにしているように見受けられる。

(2)はLRT2のある駅のエスカレータの注意書き、また(3a-b)は乗車券売機のもので、一部英語のみの表記もあるが、原則バイリンガル表示である。



高架鉄道での乗車券売機自体は、調査段階では、新しい路線のみで見られるものであった。旧路線の乗車券売場でも二言語使用がされている場合もあるが、上記のような例ほどきちんとしたバイリンガル表示でないことが多い。

また、高架鉄道のプラットフォームなどで、マナー向上や注意を促す表示も、バイリンガル表示が増えている。それぞれ、(4a)スリに注意 (4b)子どもから目を離さぬように (4c)MRTを清潔に (4d)つばを吐くな (4e)うろつくな であるが、(4a-b)ではJollibeeというハンバーガーショップの宣伝がついているということが関係しているのか、タガログ語を主にしているが、(4c-e)では、ほぼ2言語の扱いは同等といえる。

(4a)



(4b)



(4c)



(4d)

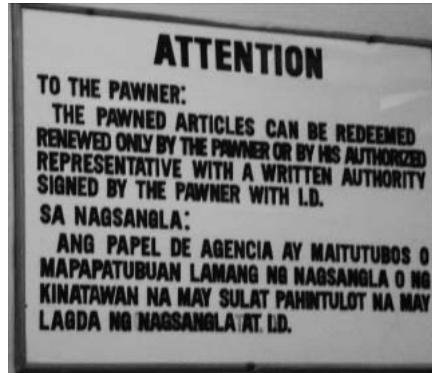


(4e)

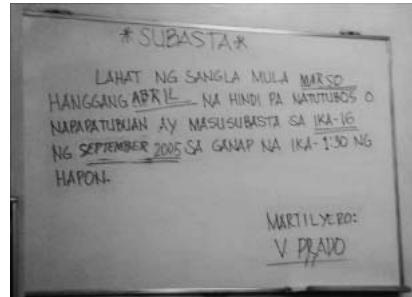


また、次の(5)は、質屋における注意書きである。すべての質屋にきちんとバイリンガル表示があるわけではないようだが、(5a)の掲示のすぐ横にあったホワイトボードには、(5b)のように「競売」についての案内がタガログ語のみで記されていた。

(5a)



(5b)



マニラでは、質屋はかなり町中に多く見られるが、質屋の場合には、タガログ語での表記が多い印象がある。これも、質屋通いをする「層」を意識すると、英語よりはタガログ語、ということになるのかもしれない。

また、別のバイリンガル表示の例としては、大規模ショッピングモール内のスケートリンクの所にある(6)の観覧客への注意である。このモールでは、比較的英語での指示が多く見られたが、はっきりとバイリンガル表示されているものは、あまりなかったように思う。また、(7)は公衆電話における電話のかけ方についての一部で、英語を主にしつつ説明文ではバイリンガル表示を基本としている。

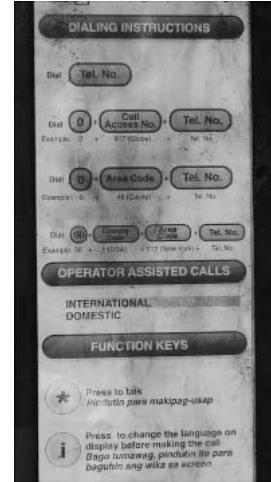
(6)



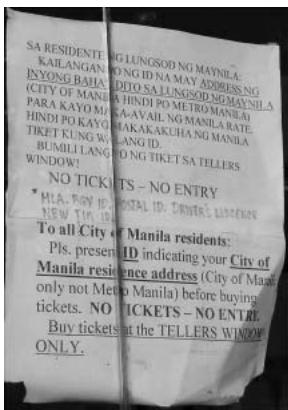
(7a)



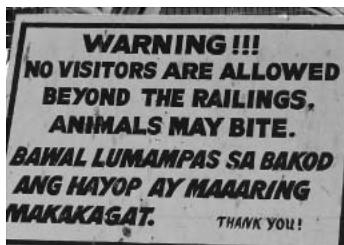
(7b)



(8a)



(8b)



(8c)



(8a)はチケット販売所にあったもの、(8b)は動物への接近しないように、という警告、(8c)は上らないこと、という注意書きであるが、どちらの言語を上位に書くかについては、あまり一貫性がない。

### 3-2. コードミキシング表示

次に、二言語を使用しているが、バイリンガル表示ではなく、混在している例である。まず、バイリンガルではないものの、類似のことを表示しているのが、次の(9)である。

(9)



上に書かれているタガログ語は、「立ち入り禁止」、その下に英語で「従業員のみ」となっている。タガログ語の方が目立つ書き方をしているという点、同様なことを伝えてはいるが、表現を変えているこのケースの作成者の意図はどういったものであろうか。BAWALは「禁止」を表し、町中でもよく見かけるもので、禁止を目立たせるということに起因しているのかもしれない。

次の(10)の例では、製品の宣伝のための看板で、製品名自体がPrideという英語であり、「ナンバー1、洗濯機用洗剤」と英語で記され、その下にタガログ語で「Prideは自然に優しい」といったことが記されている。こういったタイプのものは、広告・宣伝の類には、かなり見られる。

(10)

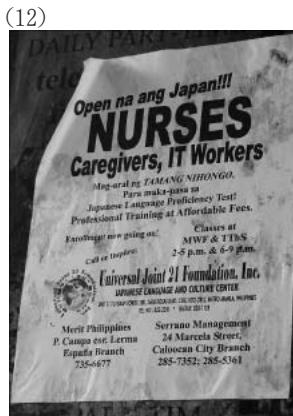


(11)



また、(11)の例は、ナヨンピリビノ（フィリピン文化村）の前にあった看板で、右端には英語で園内のアクティビティが記され、左側の3分の2位を使って4行記されている。最後の行はNayong Pilipinoという場所の名前であるが、1行目にはRelax & Enjoyという英語、2～3行目はタガログ語表記（「新鮮な空気」など）となっている。

次の(12)は、町中の張り紙であるが、大きく英語で、Nurses, Caregivers, IT Workersと英語（看護士・介護士・IT関係労働者）という職種の募集広告で、上には日本からの募集ということがタガログ語で記されており、全体としても混在表現（コード・ミキシング）である。募集要件がその下に記されているが、「日本語専攻の学生で、日本語習熟度テスト（Japanese Language Proficiency Test）に合格しているもの」などと、記されている。どちらかというと、英語が主である広告であるが、英語だけしか理解しないものには、細かい部分はわからないだろう。



また、(13)は、商店街の一軒の靴屋。店の名前の Weston の下には英語で shoe store とあるが、その下には、「割引価格」というタガログ語(Bagsak Presyo)と、10–50% off と On selected items (選りすぐりの品々) という英語がきている。こういう状況で、“Discount Price”という英語を使っても良さそうである場面で、タガログ語が出現している。また、(14)では、「たった25ペソ」の Lang (onlyの意) が入り込んでいるものである。

### 3-3. 単一言語表示（英語）

次に、町中に見かける英語のみの掲示物である。内容については細かく説明しないが、こういう内容のものは、(15c)の右下と(15j)の「ゴミを捨てるな」を除くと、英語の表示が多いように思われる。但し、(15i)などは、幹線道路沿いによく見られるもので、類似のタガログ語版も存在している。



(15g)



(15h)



(15i)



(15j)



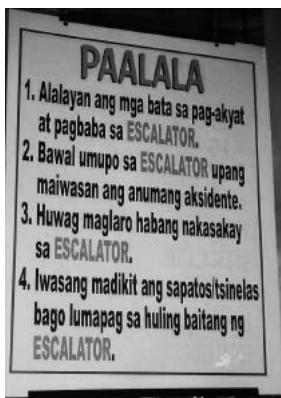
(15k)



### 3-4. 単一言語表示（タガログ語）

タガログ語のみの例としては、(16)のような例で、(16a)は大衆的なデパートのエスカレータの所にあった注意。また、(16b)は、「ゴミを減らそう、ゴミの分別をしてリサイクルをしよう」という環境保全の掲示。(16c)は「咳の苦しみのために」という薬用品の大きな看板の例である。「ゴミ捨て禁止」や「ゴミの集積場について」など、「ゴミ」絡みの多くはタガログ語のものが圧倒的に多い印象で、英語(15j)などは、少数派であるように思う。

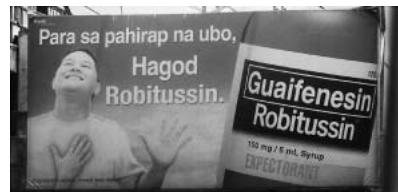
(16a)



(16b)



(16c)



また、(17)のような交通標示に関わるものは、英語のものとタガログ語のものが両方とも存在しているが、下記は「横断禁止」と「乗降禁止」などで、幹線道路などでは、印象的には、タガログ

語表示が多いと感じられる。

(17a)



(17b)



(17c)



また、町中でよく見かけるのが、「ゴミ捨て禁止」の表示で、手書きで塗に記されたものも多く、圧倒的にタガログ語による表示である。生活に密着しているものについては、タガログ語が選択されるものが多いように思う。

(18a)



(18b)



(廃棄物・ゴミを捨てるな)

また、「ゴミ捨て禁止」とともに、手書きのタガログ語でよく見かけるものに次の(19)の「小便禁止(Bawal Umihi Dito)」がある。かなり清掃が行き届いている比較的高級な店が多くある地域ではあまり見かけないものの、普通の路地などにはかなり多く見られる。これは、道ばたでの小用が多くなされている実体をよく反映しているといえるかもしれない。

(19a)



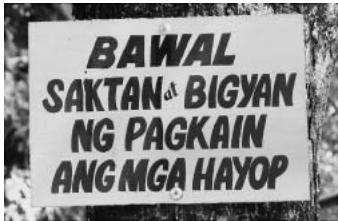
(19b)



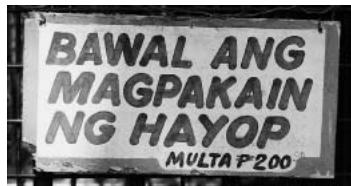
なお、「小便禁止」は条例にもなっており、手書きとは多少異なる形で、(19b)のように、罰金などを記載して禁止を訴える掲示もよく見かける。

最後に、次の(20)は、先にバイリンガル表示として提示したマニラ動物園内からの例で、「動物を傷つけたり餌をあたえるな」「柵の内側には入るな」などの意味のものである。

(20a)



(20b)



(20c)



#### 4.まとめ～今後の課題

本稿では、本研究が対象とするデータの一部として、看板・掲示の類に見られる多言語使用状況の具体例を提示した。こういった言語状況は、一般市民が日常的に目にするものであり、日常の必要性を満たしている限りにおいて、自然に受け入れられ、一般市民は複数言語の混在に違和感はないあまり抱いていないようである。しかし、この状況は、フィリピンにおいて、国語が確立されていない現状を反映していると考えることもできる。

現在の状況が、国語が確立するまでの過渡期的状況であるのかどうかは、何十年後かに振り返ってはじめてわかることがあるが、毎日使用されているものであるため、国家戦略としての言語政策をとったとしても、急激な変化にさらされるということはないだろう。だからこそ、言語使用者の言語運用能力にも影響を与える可能性もある。

今回紹介した言語表示の状況は、通常の話し言葉・書き言葉などとは異なるものであるが、発信者・受信者の言語運用力の一端を示していると考えることもでき、複数の言語が使用される場での言語使用者の意識などを解明する手がかりにもなる。また、複数の言語が言語運用の場に存在することが、母語のレキシコンや文法などにも、少なからず影響を与えている可能性もある。

また、フィリピンのように日常的に複数の言語にさらされている場合の多言語表記とそうではない場所での場合などの比較をすることによって、よりフィリピンでの状況をきちんと把握することもできると考えられる<sup>5</sup>。

今回は、掲示物・ポスター・広告・宣伝の類の具体例とともに現状を紹介したが、今後、より多くのデータや他の事例や他の言語状況を考察し、使用場面と言語選択の間の関係について分析する必要がある。

現状から、フィリピンでの言語使用実態について考察することが目的であるので、公共性の高い場での掲示などが、定点観察などから変化が見られるかどうかなどにも注目しつつ、発信者・受信者の意識などについてはアンケート調査などを実施しつつ、今後も考察を継続していきたい。

\* 本研究は、平成16～18年度東京成徳短期大学特別研究費、及び平成16～18年度大学教育高度化推進特別経費（文部科学省）からの援助を受けて行った研究成果の一部である。

#### 注

1. Social Weather Stationsの調査によると、話し言葉の理解が、2000年の77%から2006年では65%に落ちているという報告がある。(March 2006 Social Weather Survey : National Proficiency In English Declines, <http://www.sws.org.ph/>より)
2. フィリピンの言語政策については、大上(1997)に概観がある。また、小野原(1998)、Kawahara (2002)には、

個別調査など詳細な記述がある。

3. 本稿では、特にフィリピン語とタガログ語との区別については論ぜず、「タガログ語」という名称を用いる。
4. 本研究のための資料収集は、首都マニラを中心に年に2度程度・1週間程度の滞在を2年程行っている。マニラ以外では、ルソン島北部のイロカノ語圏でも数か所（ラワグ・ビガン・バギオ・バナウェなど）行ったが、いずれも短期の滞在であるため、資料数などは圧倒的にマニラでのものが多く、今回提示した実例すべてはマニラで収集したものである。
5. 既に、近隣アジア諸国（シンガポール、マレーシア、ベトナム、ラオス、カンボジア、台湾、韓国）の多言語表示の状況についても関連データを収集しており、日本の状況も合わせ、今後比較検討をしたい。

### 参考文献

- 東 照二. 1997.『社会言語学入門』研究社出版.
- 大上 正直. 1997. 「第2章 フィリピンの言語政策」小野沢 純（編）『A S E A Nの言語と文化』高文堂出版社. pp. 47-72.
- 大和田 栄. 2004. 「タガログ語書き言葉に見られる英語とのコードスイッチング —タガログ語新聞を対象として—」『東京成徳短期大学 紀要 第37号』 pp. 15-23.
- 小野原 信善. 1998.『フィリピンの言語政策と英語』窓映社.
- 山本 真弓（編）. 2004.『言語的近代を超えて 〈多言語状況〉生きるために』明石書店.
- Himmelmann, Nikolaus P. 2005. "Tagalog" *The Austronesian Languages of Asia and Madagascar*. Ed. by Alexander Adelaar and Nikolaus P. Himmelmann, Routledge. pp.350-376.
- Kawahara, Toshiaki. 2002. *Languages and Language Policies in Insular Southeast Asia - Focusing on the Philippines and Malaysia -*. Shumpusha.
- Poplack, Shana. 1980. "Sometimes I'll start a sentence in Spanish y termino en Espanol : toward a typology of code-switching" *Linguistics* 18. pp. 581-618.

(2006/12/06提出)